

大松遺跡



柏北部東地区の遺跡展

あちゅう

講演会講演要旨

め

め

地中からの目覚め

小山台遺跡



駒形遺跡

令和5年2月19日(日)



千葉県立中央博物館 講堂



【主催】(公財)千葉県教育振興財団 【共催】千葉県立中央博物館・柏市教育委員会・船橋市教育委員会
【後援】千葉県教育委員会

【問い合わせ】(公財)千葉県教育振興財団文化財センター ☎043-424-4850

※本事業は、令和4年度国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金(「地域の特色ある埋蔵文化財活用」事業)の交付を受けて実施しています。

令和4年度出土遺物公開事業 柏北部東地区の遺跡展 —地中からの目覚め—

日 時 令和5年2月19日(日) 10:30分～15:30分
場 所 千葉県立中央博物館 講堂

開催趣旨

柏北部東地区の発掘調査では、旧石器時代から近世まで数多くの考古学的成果を上げています。その成果は15冊の発掘調査報告書にまとめられており、主な成果は今回の展示会で広く公開しているところです。

今回、展示の内容をさらに深掘りした講演会により、皆さまに考古学の魅力や醍醐味を感じ取っていただけると幸いです。

10:30～10:45 開会挨拶 中村 敏行 (公財) 千葉県教育振興財団理事長

10:45～11:00 開催館挨拶 植野 英夫 千葉県立中央博物館長

講演

11:00～11:30 「柏北部東地区の旧石器時代 —前半期の二つの様相—」
島立 桂 (公財) 千葉県教育振興財団

11:30～12:00 「柏北部東地区の古墳時代 —カマドと土玉と石製模造品—」
當眞 嗣史 (公財) 千葉県教育振興財団

12:00～13:00 昼 食

13:00～14:10 「柏市小山台遺跡・大松遺跡の縄紋中期土器 —多様で華麗な紋様を楽しもう—」
西川 博孝 東金市文化財審議会委員

14:10～14:20 休 憩

14:20～15:30 「貝塚のあるムラ・ないムラ —海鮮食材利用からみえる縄文社会—」
西野 雅人 千葉市埋蔵文化財調査センター

柏北部東地区の旧石器時代

—前半期の二つの様相—

島 立 桂

概 要

旧石器時代とは、どのような時代だったのでしょうか。それは、現在とは気候・環境が大きく異なる「氷期」に、絶滅動物などとともに人々が暮らしていた時代です。「氷期」は今から38,000年前～16,000年前の期間と考えられており、特に、今から28,000年前～24,000年前は、最も寒くなった時期（最終氷期最寒冷期）でした。年間平均気温は今より7℃低く、海水面も120m～140mほど低下していたと言われています。その一方で、現在とそれほど変わらない時期もあったとされ、旧石器時代の人々は、周期的に変動する気候と環境に適応しながら、狩猟・採集生活を送っていたと考えられています。

*最終氷期は、およそ7万年前～1万年前。最終氷期最寒冷期（Last Glacial Maximum/LGM）の期間は、諸説あり。当時の気候は、グリーンランドの氷床などから採取された、氷に閉じ込められた酸素（同位体¹⁸Oの割合）を調べることで、わかってきました。今回扱う旧石器時代は、酸素同位体ステージ（Marine Isotope Stage/MIS）の2と3にあたります。

千葉県の上総台地は、石器の材料に適した石材が産出しない「石材消費地」でした。そのため、この地域の遺跡から出土する石器の石材は、その多くが県外から持ち込まれたものです。それらは、他地域の人々との交易によってではなく、季節的に居住地を変える「移動生活」を送る中で、調達していたと考えられています。したがって、遺跡から出土する石器の石材を調べることで、当時の移動範囲やそのルートを知る手掛かりが得られるのです。

*上総台地の遺跡から出土する石器の石材は、北関東や東関東を中心に、中部高地や東北地方、県内では上総丘陵の砂礫層や嶺岡などからもたらされています。

柏北部東地区では、13か所の遺跡を発掘調査した結果、12か所から、旧石器時代の石器・礫が見つかりました。

旧石器時代の石器・礫は、遺跡の中に万遍なく散らばっているわけではなく、その多くは直径4mほどの範囲にまとまって発見されます。このまとまりをブロック（または遺物集中地点）と呼んでいます。ブロックには、石器やその破損品、石器を作った時の石の破片などが見られ、中には、割れた石片同士が接合するものが見つかることから、比較的短期間に使用された、石器の製作や使用の場所と考えられています。

柏北部東地区では、12か所の遺跡から、こうしたブロックが247か所見つかるとともに、石器・礫が16,243点出土しました。この他、ブロックに属さない、単独で分布する石器・礫も387点見つかっています。

石器・礫が含まれていた地層は、おもに、富士・箱根・丹沢などの山々に由来する火山灰が風化した赤土（火山灰の中の鉄分が錆びて赤い）で、これを「立川ローム層」と呼んでいます。

*焼けた礫のまとまりを「礫群」と呼びます。礫群は、立川ローム層Ⅳ層下部・Ⅴ層で最も多く、その上下の層でも見つかりますが、Ⅲ層上部の礫群は、礫の破片が下層のものに比べて、細かくなっています。礫の使い方が上下の層で違っていた可能性があります。

表1 柏北部東地区の旧石器時代遺跡一覧

出土層位		矢船Ⅰ	矢船Ⅱ	駒形	富士見	原畑	花前Ⅲ	寺下前	大松	小山台	八反目台	館林Ⅱ	合計
Ⅲ上～Ⅱ下	ブロック数		1										1
	点数		199										199
Ⅲ上	ブロック数		1					1		6	1		9
	点数		2					3		105	100		210
Ⅲ下～Ⅲ中	ブロック数		11	4		7						1	23
	点数		759	340		304						31	1,434
Ⅳ上～Ⅲ下	ブロック数								1	18			19
	点数								28	1,034			1,062
Ⅴ～Ⅳ下	ブロック数			4	11	22	1		2	29		4	73
	点数			228	1,042	1,287	28		36	1,655		204	4,480
Ⅶ・Ⅵ	ブロック数		3	2		2				13		4	24
	点数		132	58		147				818		308	1,463
Ⅶ下	ブロック数	6	5										11
	点数	264	145										409
Ⅸa～Ⅶ下	ブロック数				7					21		4	48
	点数				432					2,276		152	3,648
Ⅸc～Ⅸa	ブロック数				4	7		1	20	5			37
	点数				625	119		52	2,449	54			3,299
Ⅹa～Ⅸc	ブロック数				2								2
	点数				39								39
合計	ブロック数	6	37	10	24	38	1	2	23	92	1	13	247
	点数	264	2,025	626	2,138	1,857	28	55	2,513	5,942	100	695	16,243

立川ローム層を地層に沿って10の段階に区切り、ブロック数と出土した石器数を集計すると、立川ローム層Ⅴ層～Ⅳ層下部が最も多く、次いでⅨa層～Ⅶ層下部、Ⅸc層～Ⅸa層と続き、この3つの段階で、立川ローム層全体のブロック数の64%、石器数の70%を占めます。この3つの段階は、合計すると8,000年間ほどですので、旧石器時代全体を22,000年間とすると、1/3程の期間ということになります。

1/3の期間に70%もの石器が含まれているので、この期間は、人々の活動が活発だったと言えます。このような、時期による遺跡数の変化は、柏北部東地区に限らず、南関東全体でも見られます。

旧石器時代は、2万年以上の期間の中で、石器の形態やその製作技術、利用される石材などが変化しています。今回は、特に千葉県で特徴的な2つの時期の石器群について、紹介したいと思います。

1 環状ブロック群について

立川ローム層Ⅹ層～Ⅸ層（今から38,000年前～34,000年前）の遺跡では、ブロックが20m～50m四方ほどの範囲にまとまって分布することが多く、いくつかの遺跡では、10～20か所のブロックがドーナツ形に廻っています。これを、「環状ブロック群（または環状ユニット）」と呼んでいます。

柏北部東地区では、大松遺跡、小山台遺跡で環状ブロック群が見つかりました。

大松遺跡第1文化層（立川ローム層Ⅸ層）では、16か所のブロックが、直径約50mの大きさで、途切れながらも環状に廻り、その内側にも4か所のブロックが近接して分布し、合計20か所のブロックで構成されています。

環状ブロック群の特徴のひとつに、石器や石片が複数のブロック間で、数多く接合することがあげられます。特に、隣りあうブロック間だけでなく、中央部を挟んだ反対側のブロックとも接合関係が多いことが、他の時期のブロック群とは異なる現象です。このことは、環状ブロック群が、概ね、同時期に形作られたことを示しています。

出土した石器の内容は、狩猟用の利器（ナイフ形石器）や加工具（削器）、石器を製作した時の石くず（剥片・碎片・石核）など合計2,449点で、石器の石材の主なものは、黒曜石（1,828点/75%）、流紋岩（105点/4%）、頁岩（254点/10%）、玉髓（242点/10%）などです。

利用された石材の多くは、栃木県を中心に、群馬県や茨城県北部などを含めた北関東で産出するものが多いと考えられます。こうした傾向は、同時期の千葉県多くの遺跡で見ることができます。また、黒曜石をはじめとする主な石材は、どのブロックでも、同じような組合せになっています。

小山台遺跡第2文化層（立川ローム層Ⅸ層上部）でも、15か所のブロックによって環状ブロック群が形成されています。石器の石材は、ガラス質黒色安山岩と玉髄、チャートが多く、多くのブロックで、その組合せが共通しています。

さて、近年、旧石器時代の環状ブロック群が取上げられる際は、ブロックと居住施設（簡易のテント）が重ねられ、大規模な「環状のムラ」が復元されています。また、旧石器時代は、小規模な集団が季節的に移動し、居住地を定期的に変えて暮らしていたと想定されていますが、環状ブロック群については、一年の多くを別々に暮らす小規模な集団が、特別な事情（例えば、大規模な狩猟活動等）のために、一時的に集合して、環状ブロック群を形成したと解釈されています。

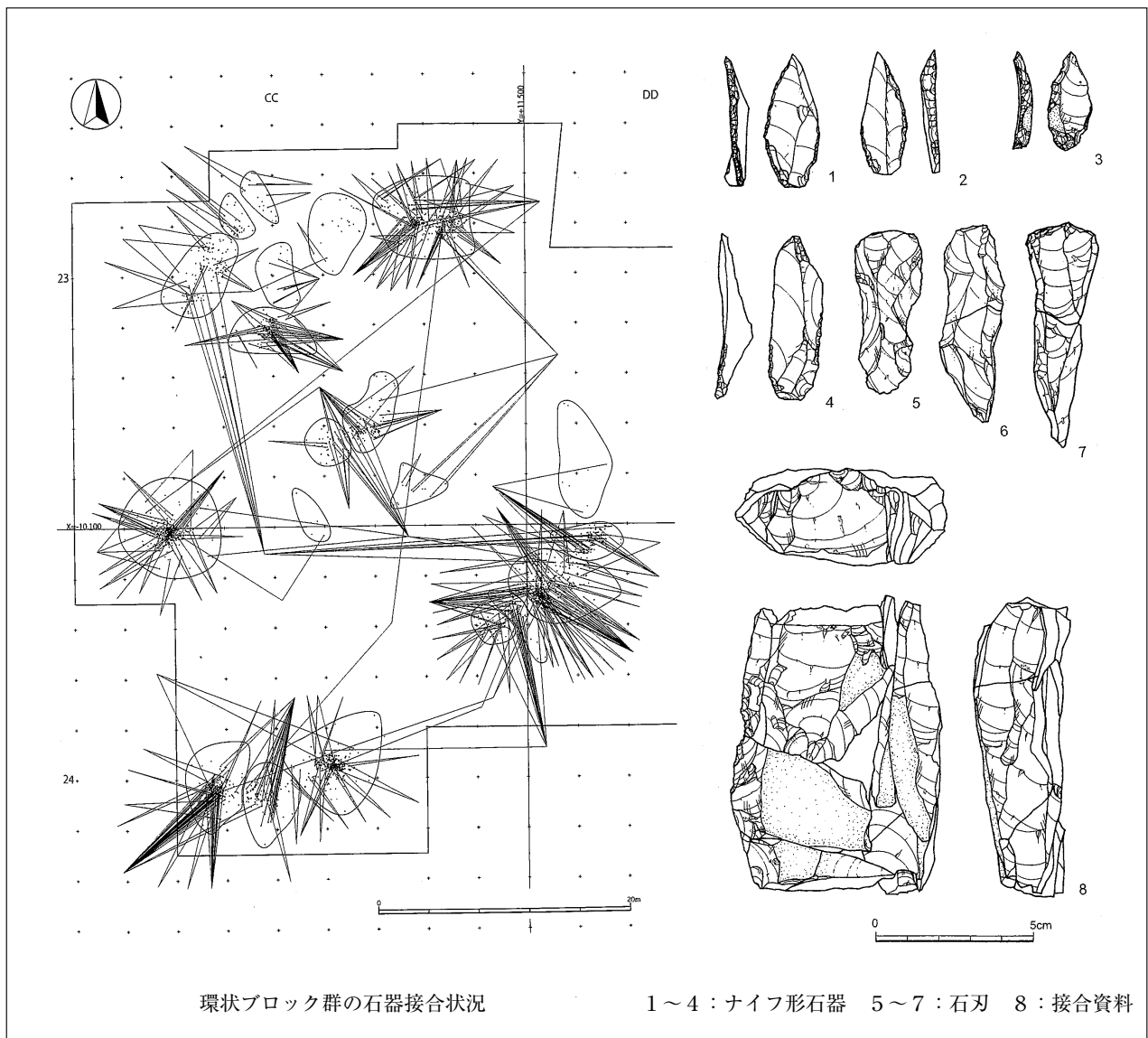


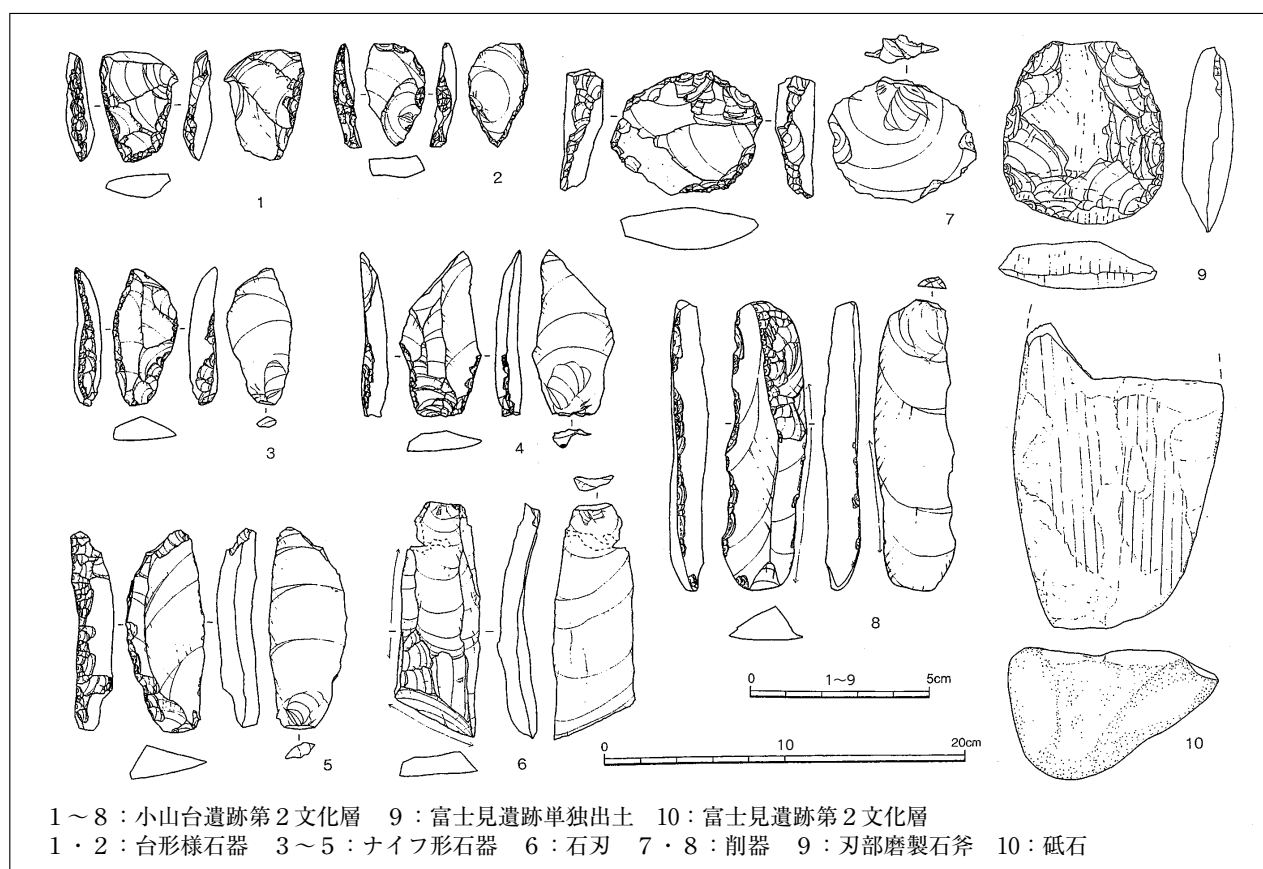
図1 大松遺跡の環状ブロック群と石器（財）千葉県教育振興財団2008

大松遺跡第1文化層や小山台遺跡第2文化層では、県内の他の遺跡（例えば、酒々井町墨古沢遺跡、四街道市池花南遺跡など）と同様、環状ブロック群を構成する各ブロックの石材の組合せがよく似ています。もし、各ブロックが小規模な集団の活動を反映したもので、ブロック群全体が同時に存在していたとするならば、当時の人々は、いつも大規模な集団で移動し、生活を共にしていたことになってしまいます。

はたして、環状ブロック群は、短期間（例えば、季節的に限られた期間）に、小規模な集団が集合して「環状のムラ」を作り、目的を果たすと解散した痕跡なのでしょうか。全く別の見方ですが、例えば、小規模な集団が、定期的に千葉県と北関東とを往復し、同じ場所（同じ遺跡）を繰り返し利用した痕跡と考えることもできるのではないかと思います。

表2 大松遺跡第1文化層の石材構成 (上段 点数、下段 ブロック内の割合) (赤：50%以上、青：30～49%、緑：10～29%)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	合計	
黒曜石	16	22	99	2	78	13	189	247	108	55	4	7	2	59	9	45	278	263	112	220	1,828	75%
	89%	58%	78%	14%	70%	57%	55%	79%	96%	98%	80%	47%	33%	43%	15%	75%	73%	90%	98%	99%		
玉髄	1	14	17	2	5	2	83	45	2		1	2		21	16	5	10	16			242	10%
	6%	37%	13%	14%	5%	9%	24%	14%	2%	0%	20%	13%	0%	15%	27%	8%	3%	5%	0%	0%		
頁岩	1	1	2	8	5	2	43	7	1	1		4	4	57		1	42	5			184	8%
	6%	3%	2%	57%	5%	9%	13%	2%	1%	2%	0%	27%	67%	42%	0%	2%	11%	2%	0%	0%		
流紋岩				1			12	12	1			1			32	9	25	8	1	2	104	4%
	0%	0%	0%	7%	0%	0%	3%	4%	1%	0%	0%	7%	0%	0%	54%	15%	7%	3%	1%	1%		
珪質頁岩		1	5	1	23	2	12	1							1		22	1		1	70	3%
	0%	3%	4%	7%	21%	9%	3%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	2%	0%	6%	0%	0%	0%		
チャート			1			4	4											2		1	12	0%
	0%	0%	1%	0%	0%	17%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	1%	0%		
その他			3					1	1			1			1		1				8	0%
	0%	0%	2%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	0%	7%	0%	0%	2%	0%	0%	0%	0%	0%		
合計	18	38	127	14	111	23	343	313	113	56	5	15	6	137	59	60	380	293	114	223	2,448	100%



1～8：小山台遺跡第2文化層 9：富士見遺跡単独出土 10：富士見遺跡第2文化層
1・2：台形様石器 3～5：ナイフ形石器 6：石刃 7・8：削器 9：刃部磨製石斧 10：砥石

図2 環状ブロック群の石器 ((公財) 千葉県教育振興財団2017・2018)

2 寒冷化と遠隔地の石材

立川ローム層Ⅶ層～Ⅵ層（今から32,000年前～30,000年前）では、前後の時期に比べて、遺跡数やブロック数、出土する石器の数量がぐっと減ります。また、出土する石器の石材にも変化が見られます。東北産頁岩や信州産黒曜石（主に和田峠、霧ヶ峰）といった、関東山地を越えた、千葉県からは遠隔地で産出する、良質な石材を利用した石器が主体を占めるようになります。

小山台遺跡第3文化層、矢船Ⅰ遺跡第1文化層、矢船第Ⅱ遺跡第2文化層では、立川ローム層Ⅶ層を中心に石器群が出土していますが、利用する石材に、東北産頁岩や利根川上流（群馬県）の黒色頁岩を主体とし、大型の石刃（縦長長方形で薄手の石片）やそれを素材とするナイフ形石器、搔器、削器などが見られます。千葉県内の遺跡からは、大型の石刃を剥離した石核が出土しないことから、石刃の生産は石材の産地周辺で行われ、製品や半製品を県内へ運んできたと想定されています。立川ローム層Ⅸ層でも多量の石刃が出土した遺跡がありますが、北関東周辺で産出する黒曜石や流紋岩、頁岩等の原石や石核が持ち込まれ、県内の遺跡で石刃生産が行われていた痕跡が見つかっており、Ⅶ層～Ⅵ層とは対照的な様相です。

この時期は、石器が欠損すると、修理をして継続利用する「再生」と、別のものに作り替える「転用」が、顕著です。大型の石刃やナイフ形石器などの利器は、使用等によって刃部が損傷すると（例えば、刃こぼれ）、損傷した部分を割り取って、新鮮な刃部を作り出します（カッターの刃と同じ）。いっぽう、利器本体が破損すると、石核に転用して、小型の石刃を生産します。得られた小型の石刃は、石器の素材に利用されています。

こうした節約型の石器は、他の時期、例えば、より上層の「東内野型尖頭器」にも見られ、遠隔地の良質な石材を利用する際の手段と考えられます。

一方、館林Ⅱ遺跡第3文化層（立川ローム層Ⅵ層）では、信州産（特に、和田峠や霧ヶ峰）の良質な黒曜石が多く利用されています。この傾向は、千葉県に限らず南関東に広く見られる現象です。

東北産頁岩とは異なり、県内の遺跡には原石や石核が持ち込まれ、中・小型の石刃や剥片が生産され、ナイフ形石器や搔器を中心とする利器の素材となっています。持ち込まれた石核は、当初、拳大程度の大きさと推定されますが、石刃生産等の作業が進行して石核が小さくなると、両極技術（はさみ割り）による剥片生産に切り替え、石核は徹底的に使い尽くされています。

東北産頁岩と信州産黒曜石をそれぞれ主体とする石器群は、石刃の大きさやその製作技術、再生や転用の仕方、石器や石材の運搬方法などに違いがあります。ただし、大きさの違いはあっても、いずれも石刃を主体とする石器群で、搔器が安定して伴うという北方的な要素があり、また、遠隔地石材の利用、ブロック内における石材の斉一性、出土石器数量の減少などの点も踏まえると、この時期は、急激に寒冷化が進行し、環境が悪化したことを反映して、年間移動距離が長くなり、千葉県での滞在期間は短くなったと想定されます。

まとめ

下総台地では、旧石器時代の前半期の石器群に、二つの様相が見られました。一つは、立川ローム層

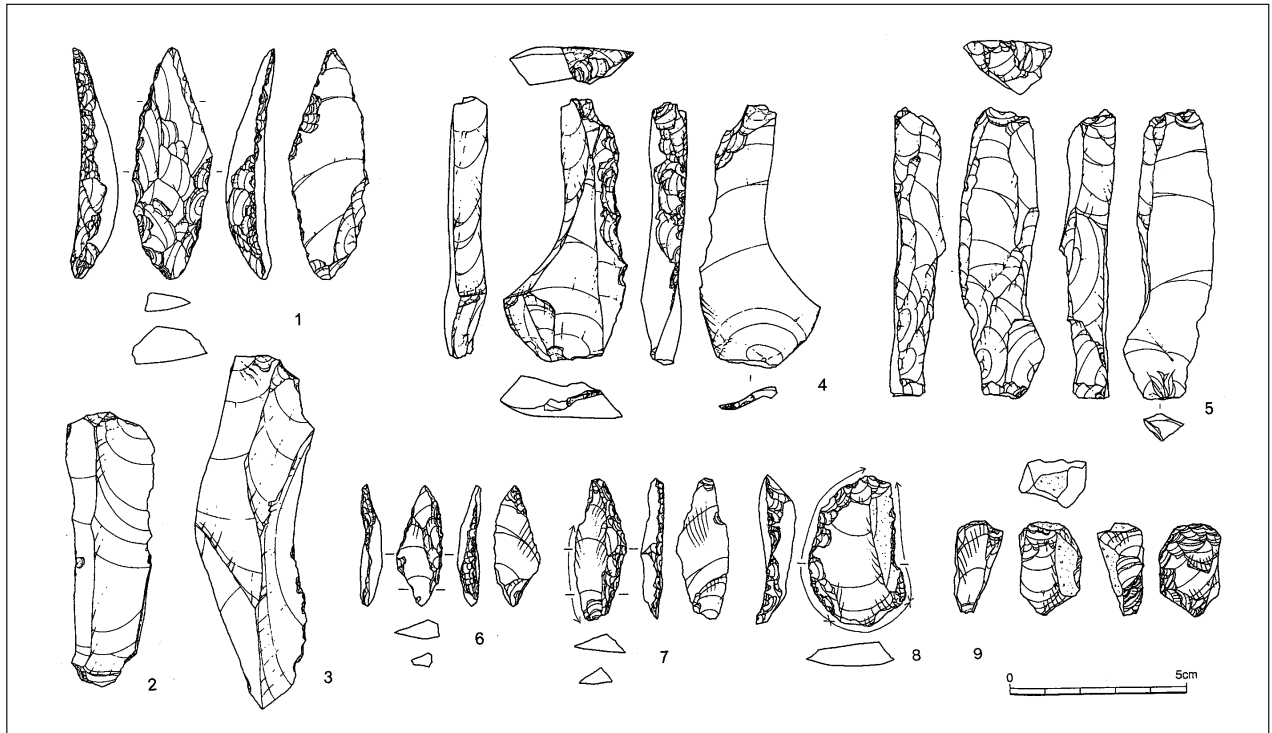


図3 立川ローム層Ⅶ・Ⅵ層の石器群（1～5：小山台遺跡第3文化層 6～9：館林Ⅱ遺跡第3文化層）
（公財）千葉県教育振興財団2017・2018）

Ⅸ層を中心とした時期で、環状ブロック群が形成され、北関東を中心とする石材が下総台地に原石や石核という形で持ち込まれ、遺跡内で石刃や剥片の生産から利器の製作に至るまで行われた石器群が見られます。もう一つは、立川ローム層Ⅶ～Ⅵ層を中心とした時期で、分散するブロックで遺跡が形成され、東北産頁岩を多用し、大・中型の石刃や利器を持ち込んで、再生と転用を繰り返す石器群と、信州産黒曜石を多用し、原石や石核を持ち込んで、中・小型の石刃を生産し、利器を製作する石器群とが見られます。

二つの様相について、前者は氷期にあって、やや温暖な気候（MIS 2）で、移動範囲も関東山地の内側だったと想定されますが、後者は急激に進行した寒冷な気候（MIS 3）で、広域に移動しなければならず、その結果、遠隔地の石材がもたらされるとともに、石器や石器の素材の軽量化が図られます。このように、石器の様相から、環境の変化とそれに適応した当時の人々の姿を垣間見ることができるのです。

参考文献

- 稲田孝司2006「環状ブロック群と後期旧石器時代前半期の集団関係」『旧石器研究』第2号 pp.55-68 日本旧石器学会
 工藤雄一郎2012『旧石器・縄文時代の環境文化史：高精度放射性炭素年代測定と考古学』新泉社
 酒々井町2019『千葉県酒々井町 墨古沢遺跡総括報告書－下総台地に現存する日本最大級の旧石器時代環状ブロック群－』
 島立 桂2013「関東地方における環状ブロック群の分布と構造－南関東－」『考古学ジャーナル』第64号 pp.15-20 ニュー・サイエンス社
 （財）千葉県教育振興財団2008『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書1－柏市大松遺跡－ 旧石器時代編』
 （公財）千葉県教育振興財団編2017『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書10－柏市小山台遺跡－ 旧石器時代編』
 （公財）千葉県教育振興財団編2018『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書13－柏市矢船Ⅰ遺跡・矢船Ⅱ遺跡・駒形遺跡・富士見遺跡・原畑遺跡・花前Ⅰ遺跡・花前Ⅲ遺跡・寺下前遺跡・大松遺跡・小山台遺跡・八反目台遺跡・館林Ⅱ遺跡－ 旧石器時代編』
 新田浩三1995「下総型石刃再生技法の提唱」『研究紀要16－20周年記念論集－』 pp.1-40 千葉県文化財センター
 橋本勝雄2022「下総台地からみた旧石器時代の東北頁岩製石器の特質－関東地方の調査成果を中心として－」『岩宿フォーラム2022/シンポジウム『東北頁岩と北関東地方』 予稿集』 pp.56-69 岩宿博物館

柏北部東地区の古墳時代

—カマドと土玉と石製模造品—

當 眞 嗣 史

はじめに

今回の展示の中心となっているのは、古墳時代中頃の住環境革命です。縄文時代以来何千年にもわたって、人々の暮らしの中には、住居の真ん中に炉が有り、今でいう囲炉裏のような、炊事とともに灯りとりや暖房を兼ねていました。ところが、古墳時代中頃5世紀になり朝鮮半島から窯を使って高温焼成する須恵器が伝わると、窯の技術を応用したカマドが出現します。さらに土玉を使用した祭祀の実態や石製模造品の製作と石製模造品を使用した祭祀など検出された遺構・遺物から、様々なことが明らかとなってきました。その一端を紹介します。

1 古墳時代集落の様相

古墳時代前期になると、柏北部東地区では、駒形遺跡で竪穴住居跡が検出されました。古墳時代中期になると、地区全体に散在して検出されました。古墳時代後期になると、遺構を検出した遺跡が極めて

表1 柏北部東地区古墳時代遺構一覧

	遺構名	時期	平面形態	主軸	直交軸	主柱穴	壁溝	間仕切り溝	炉・カマド	貯蔵穴	梯子穴	土玉	手捏ね	石模(剣)	石模(鏡)	鉄製總柄具		
柏北部東地区3																		
原畑遺跡	SI020	古中	方形	(4.0)	(4.0)	7	無	無	1	1								
	SI021	古中	方形	(5.3)	5.32	3	全周	無	1	1								
柏北部東地区5																		
駒形遺跡	SI101	古前	長方形	7.33	6.53	4	全周	無	1	無	3	1	3					
	SI102	古前	方形	6.95	(6.6)	4	全周	無	無	無	1	1	-					
	SI103	古中	方形	4.85	4.79		無	無	無	カマド	1		9	-			カマド廃棄祭祀・カマド初現・炉存在か？炉に伴う土玉6点、カマドに伴う土玉3点	
柏北部東地区7																		
富士見遺跡	SI084	古中	方形	5.04	4.53	6	無	無	1	無			1					
	SI086	古中	方形	4.60	4.84	4	全周	無	2	1	高まり						焼亡住居	
	SI087	古中	方形？	(2.7)	(2.7)		無	無	無			1						
	SI101	古前	方形	5.14	5.54	4	途切れる	無	1	1		4	3					
	SI105	古中	方形	5.65		4	途切れる	無	2	無								
	SI106	古中	長方形	4.08	5.29		無	一部	無	1	1							炉壁際
	SI107	古中	隅丸方形	3.23	2.8		無	無	1	無								土製円板1点
	SI115	古前	方形	3.40	3.62	2	全周	無	1	1								壁柱穴
	SI131	古中	方形	3.70	4.7		無	無	無	3			1					炉壁際
	SM001	古後？	円墳	9.20	9.1													
柏北部東地区9																		
大松遺跡	SI181	古後	方形	5.40	5.40	4	全周	無	カマド	1	1							駒形SI030(柏北部東地2)
柏北部東地区11																		
花前Ⅲ遺跡	(3)SI001	古中	不整形	9.20	8.00	3	無	無	無	1								
矢船Ⅰ遺跡	(2)SI004	古中	方形	3.30	2.75	1	無	無	1	1								
矢船Ⅱ遺跡	(6)SI001	古中	方形	4.55	4.38		無	全周	有	1	1		1					
	(8)SI001	古中	隅丸方形	3.25		5	無	無	2	1					1			
	(8)SI002	古中	方形	7.95		3	全周	無	2	無			2					焼亡住居
	(8)SI003	古中	方形	6.60	6.55	4	全周	無	3	1		2					1	赤彩有段高杯、棒状土製品
	(8)SI004	古中	長方形	5.32	4.20		無	全周	無	2	2							焼亡住居
	(9)SI001	古中	方形	6.65	6.95	4	全周	無	1	2		14						焼亡住居、金床石
	(9)SI002	古中	方形	9.50	9.5	4	全周	無	1	1								
	(35)SI001	古中	方形	6.53	6.55	4	途切れる	無	無	4	2		1		2	4		模造品原石
	(35)SI003	古中	方形	7.40	6.55	3	全周	無	無	4	1							
	(35)SI004	古中	方形	4.16	3.93		不明	途切れる	無	2	1					1		
(35)SI005	古中	方形	4.91	5.00	4	全周	無	無	3	2		10						茅敷き
(8)SM001	古中	方墳	6.38	6.26														主体部なし
寺下前遺跡	(1)SI005	古中	方形	7.10	7.32	4	全周	無	無	1	2	1	21		2	2		土玉炉跡周辺集中
	(1)SI036	古中	隅丸方形	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明							
八反目台遺跡	(1)SI001(新)	古後	方形	6.38	不明	4	全周	有	カマド	1			1					拡張建替。常総型甕
	(1)SI001(古)	古後	方形	5.28	不明	4	全周	無	カマド	1	1							土製小玉2点
柏北部東地12																		
小山台遺跡A区	SI001	古前	隅丸方形	5.00	5.20	4	無	無	1	無								焼亡住居

少なくなります。柏北部東地区では、大松遺跡、^{おおまつ}富士見遺跡、^{ふじみ}八反目台遺跡で竪穴住居跡が検出されました。それぞれ単独ないしは少数であり、大きな集落は見当たりません。

柏北部東地区では、古墳時代全体を通して、検出した遺構は極めて少ない状況です。柏市を含めた千葉県北西部では、柏北部東地区の集落と同じく古墳時代には大きな集落の存在は限られていました。

このように、柏北部東地区では古墳時代の人々の活動はそれほど活発ではありませんでした。

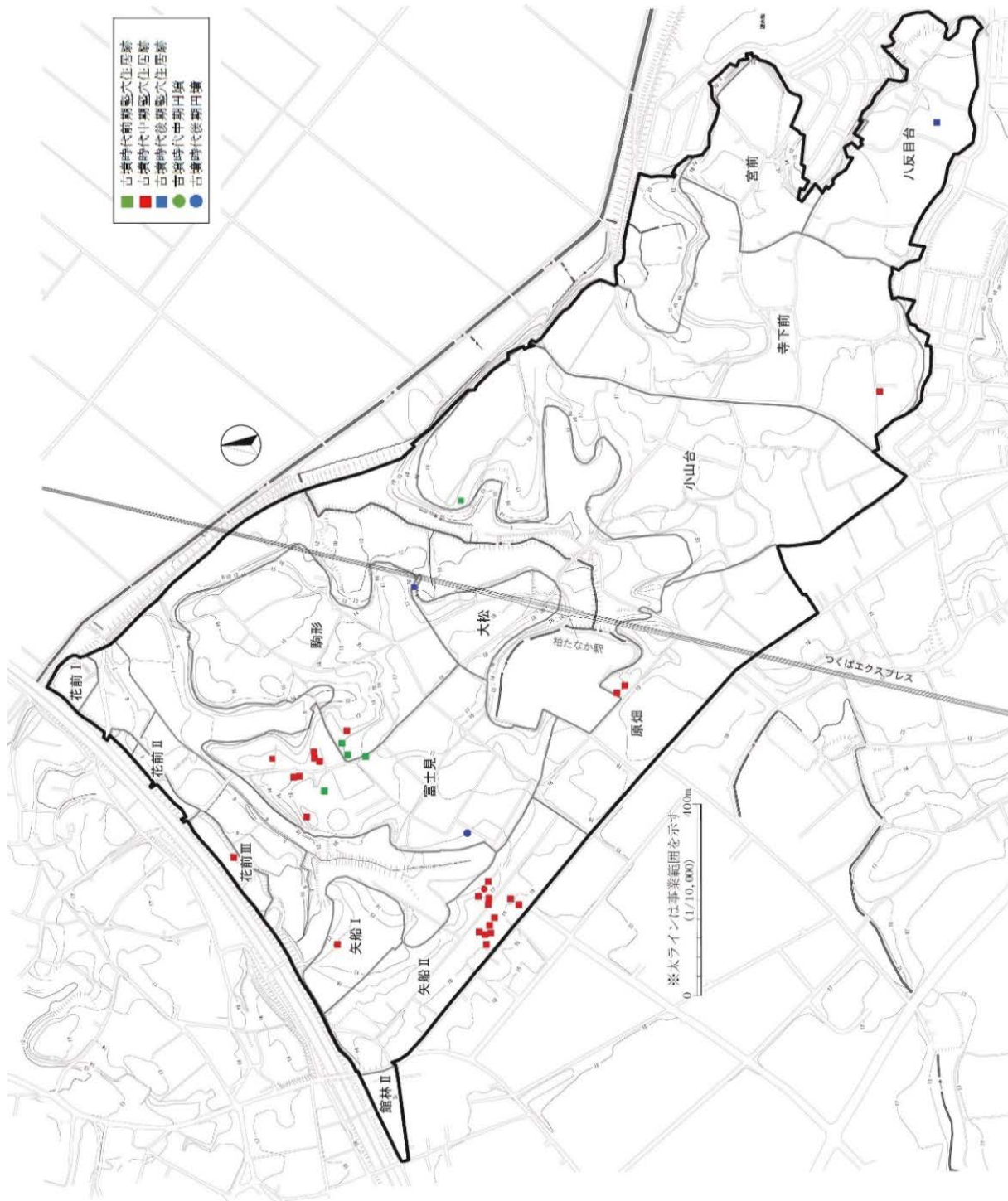


図1 柏北部東地区古墳時代時期別遺構分布図

2 炉からカマドへ

炉は、縄文時代以来、調理用はもとより、暖房や照明としての役割を果たしています。古墳時代の中頃には、房総半島において、カマドが導入されることとなります。これは、全国的な傾向で、カマドは朝鮮半島から^{ようぎょう}技術とともに伝わり、急速に全国に普及しました。しかし、一部の地域では、炉からカマドへの^{へんかん}変換が他地域より遅れるところがありました。

カマドは、竪穴住居の壁に造り付けられていました。

本体は山砂や粘土で構築し、土器が置けるように掛け口が設けられています。住居の壁を切り込んで^{えんどう}煙道を造り、煙は煙道によって住居の外に出るような構造になっていました。

カマドの出現によって、住居の構造に大きな変革がおきました。^{にた}煮炊きの場が壁際に移動するとともに、^{かべぎわ}貯蔵穴もカマド脇に移動することとなりました。そのことにより、カマドと貯蔵穴を一体化した^{ちゅうぼう}厨房空間が明瞭となります。カマドの登場によって、縄文時代以来の炉は姿を消すこととなります。

カマドの出現は、調理法の変化をもたらしました。カマドに据えられた甕には水が入れられ、その上に^{こしき}甑をのせて、蒸し器のように使用したと想定されています。お米だけではなく、^{こくろい}穀類や^{こんさいらい}根菜類がこれまで以上に広く食材として利用されるようになります。

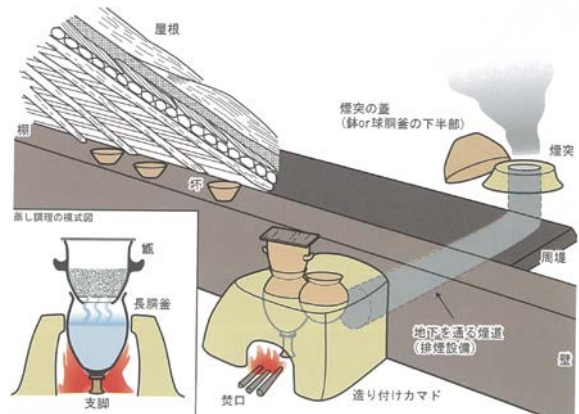


図2 カマド模式図（宮崎県立西都原考古博物館『古墳時代の「台所革命」と東アジア』P35より転載）

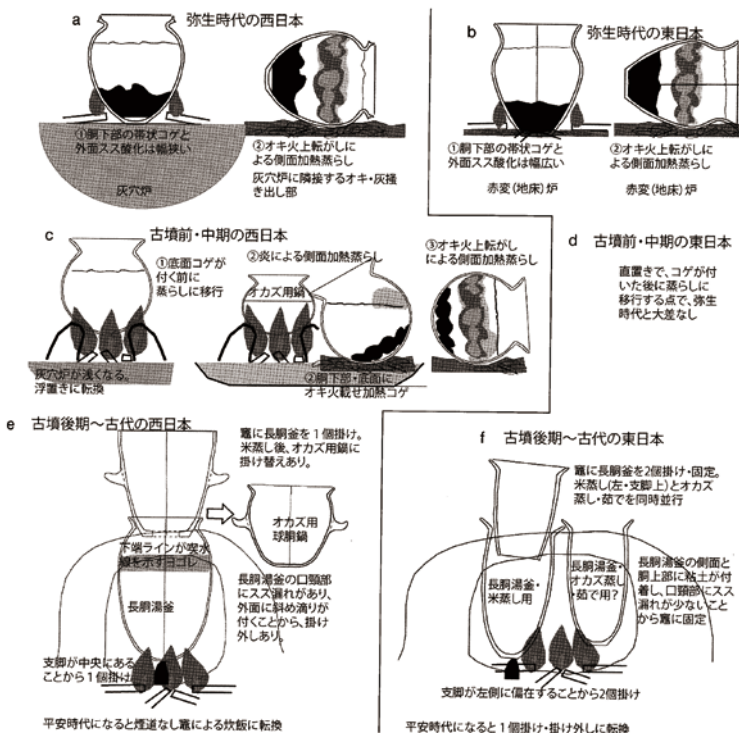


図3 東西炉・カマド構造の変遷（小林正史・外山政子『東西日本間のカマド構造の地域差を生み出した背景』『石川考古学研究会々誌』第59号2016年P58より転載）

いろいろなお米調理方法

① 湯取り炊飯(炊き上げる)



②-1 米蒸し調理(蒸し上げる)



②-2 米蒸し調理(甕で蒸し法)



④ 煮る



⑤ 炒め煮



図4 お米調理方法（宮崎県立西都原考古博物館『古墳時代の「台所革命」と東アジア』P7より転載）

それでは、柏北部東地区の炉からカマドの変遷を見てみましょう。



図5 やふねⅡ遺跡 (8) SI003



図6 駒形遺跡SI103



図7 駒形遺跡SI103カマド

古墳時代前期から中期前半の住居からは炉が検出されています。そのうち、前期の炉跡は柱と柱を結んだライン上に位置していますが、中期前半には、壁側に移動していく傾向が見て取れます。

富士見遺跡SI106・SI131では、壁に接して炉を構築しています。富士見遺跡に隣接する駒形遺跡SI103では、初現期のカマドが検出されています。駒形遺跡SI103からは、烏帽子形の炉器台が出土しており、カマドとともに炉の存在が指摘されています。炉からカマドへの変遷を考える上で貴重な資料です。この烏帽子形の炉器台は、カマドが出現する前段階の炉において、煮炊きする甕を載せる台として使用されていたものです。西日本に多く出土します。

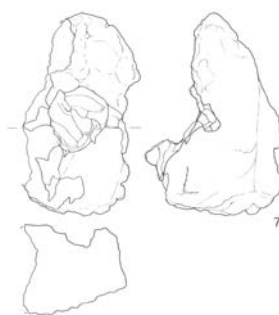


図8 駒形遺跡SI103 烏帽子形炉器台



図9 烏帽子形炉器台使用想定図 (『千葉県の歴史』「資料編考古2 (弥生・古墳時代)」P851より転載)

駒形遺跡SI103の住人は、竪穴住居を造った際に、今までの慣習に則って炉を構築したが、最新式の調理施設であるカマドにリフォームして、生活をリニューアルしたのでしょうか。調理施設の変更によって生活スタイルも大きく変更することとなります。まさに高度成長期の日本においてダイニングキッチンが登場にも似た感動があったと想像されます。



図10 戦前の台所(松戸市立博物館『企画展「戦後松戸の生活革新」 P28より転載)



図11 高度成長期の台所(松戸市立博物館『企画展「戦後松戸の生活革新」 P74より転載)

3 祭祀に使用された土玉

古墳時代の竪穴住居跡からは、球状の土製品がときおり出土します。この球状土製品のことを、土玉と呼んでいます。その用途については、不明な点があります。

土玉は、千葉県内では千葉・市原以北特に印旛沼周辺で多く出土している傾向があります。この土玉は、真ん中に穴が貫通しており、何らかの紐を通したか、もしくは、枝等に刺したかした用途が考えられています。紐を通した使用を考えた場合は、漁網の錘を想定することができるでしょう。枝に刺した使用を考えた場合は、石製模造品やあるいは手捏ね土器との共伴から「まつり」の祭具を想定することができるでしょう。

このように土玉については、以上の二通りの利用が想定することができます。

柏北部東地区の土玉の出土状況を見てみましょう。

寺下前遺跡SI005は、古墳時代中期前半の竪穴住居跡です。土玉は21点、炉の周辺から集中して出土しています。駒形遺跡SI103は、古墳時代中期後半の竪穴住居跡で、初現的なカマドが検出されています。土玉は9点、カマド付近を含めた竪穴住居跡から散在的に出土しています。

他県の出土状況ですが、埼玉県桶川市楽中遺跡では、カマド内から31個まとまって出土しており、さらにはカマド脇からは土玉の原料と思われる粘土の塊もあったことから、土玉を製作するとともにカマドの廃絶に伴う「まつり」に使う祭具として利用していることが想定されます。

土玉には使用痕があまり認められない場合や土錘とするには軽すぎる場合もあることから、漁網の錘とするよりは、むしろ「まつり」の祭具として利用されたものと考えられます。土玉は土製勾玉や手捏ね土器、石製模造品とともに「まつり」の祭具として使用されていたのでしょう。しかし、その「まつり」の実態は不明です。



図12 土玉



図13 寺下前遺跡 (1) SI005
土玉集中状況



図14 埼玉県桶川市楽中遺跡5住カマド (埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第429集『楽中遺跡』2017年より転載)



図15 埼玉県桶川市楽中遺跡5住カマド土玉集中状況 (埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第429集『楽中遺跡』2017年より転載)

4 石製模造品

石製模造品は古墳時代中期から後期にかけての古墳の副葬品^{ふくそうひん}または、祭祀遺構から見つかる遺物で、石材は碧玉や滑石^{へきぎよく かっせき}で作られます。古墳時代中期初めは刀子、斧、ノミ、ヤリガンナ、鎌などの農工具^{のうこうぐ}が石製品化され、中期中頃になると勾玉、剣、鏡などを模して作るようになります。石製模造品が造られ始めた頃は、元の形を忠実に模して製作されていましたが、だんだんと粗雑な作りに変化していきます。

石製模造品を使った祭祀の様子は判然としませんが、鏡を模した有孔円板^{ゆうこうえんばん}や剣形品、勾玉類は小さな孔があることから、そこに紐を通して、樹の枝に吊るし、祭祀を行っていたと考えられています。

県内では木更津市マミヤク遺跡^{せんぞくだい}や千束台遺跡などの祭祀遺構から数多くの石製模造品が見つかっています。また周辺の古墳では松戸市河原塚1号墳^{かわらづか}から刀子が見つかっています。

柏北部東地区では、寺下前遺跡や矢船Ⅱ遺跡の竪穴住居跡から剣形品・有孔円板が見つかっています。また、矢船Ⅱ遺跡や寺下前遺跡から製作に関わる道具と思われる砥石^{といし}や模造品の原石が見つかっています。柏北部東地区では石製模造品を製作し使用していました。

竪穴住居跡から見つかる石製模造品は古墳や祭祀遺構から見つかる石製模造品とは異なる目的で祭祀が行われたことが考えられており、小規模なムラの単位または日常の農耕儀礼^{のうこうぎらい}に関わる祈りを行っていたと考えられています。

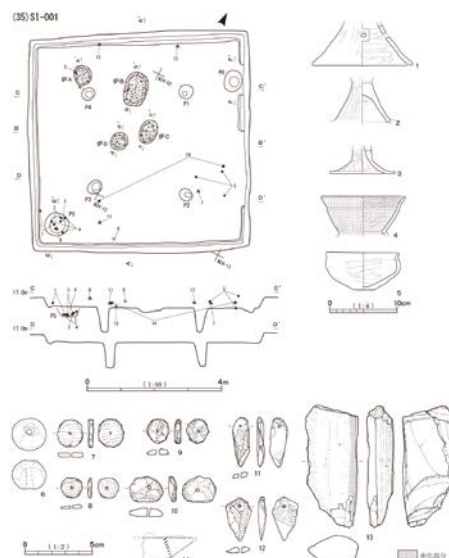


図16 矢船Ⅱ遺跡 (35) SI-001
玉作遺構



図17 木更津市マミヤク遺跡出土石製模造品 (財団法人君津郡市文化財センター広報誌『きみさらず』第7号2012年より加工転載)

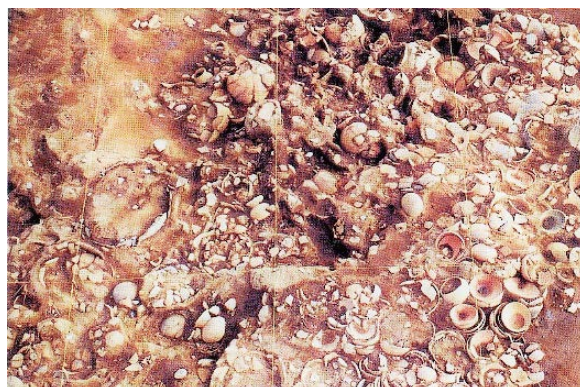


図18 木更津市千束台遺跡 (財団法人君津郡市文化財センター広報誌『きみさらず』第7号2012年より加工転載)

おわりに

このように、柏北部東地区の古墳時代は、それほど多くの方が住んでいたわけではありません。しかし、その生活の痕跡から、住環境革命が読み取れるとともに、精神世界の一端に触れることができました。ですが、まだまだ解明されていないことがたくさんあります。今後の課題として、土玉を使用した祭祀の復元があげられます。千葉県を中心とした土玉祭祀の実態に迫ってみたいと考えています。

柏市小山台遺跡・大松遺跡の縄紋中期土器

—多様で華麗な紋様を楽しもう—

西川博孝

はじめに

縄紋土器といえば、「火焰土器」がすぐ思い浮かびますが、ほかにも優れた造形の土器が各地で数多く発見されています。たとえば、図1の土器は東北地方晩期終末の壺型土器ですが、縄紋人が最後にたどり着いた技術的にも、造形的にも最も洗練された縄紋土器の極致と言えます。また、図2はやはり東北地方の早期前葉の土器ですが、はじめてフリーハンドで紋様が描かれ始めてまもない時期にもかかわらず、三角形やW字形の繊細な紋様が見事に表現されています。

今回の展示では柏市から出土した縄紋土器が多数紹介されています。中でも中期中頃に制作された土器は立体的で変化に富んだ紋様が施されていて、これらの優れた土器と肩を並べるものもあります。

ここでは、そうした中期中頃の土器について考古学的な難しい解説ではなく、まず見て面白い、すばらしいといった、美術品を鑑賞する視点からこれらの土器を見てみようと思います。

1 縄紋土器鑑賞の視点

縄紋土器は低い温度で素焼きしているため、特別に彩色したものを除いて、粘土の違いによって赤みがかったもの、黄色味がかったもののほか、焼成の時に着いた黒斑を残すものがありますが、ほとんどの土器は茶色を主体としているため、陳列されていても変化に乏しい単調な印象を受けてしまいがちです。しかし、一歩立ち止まってその形や紋様を見てみると、実に多彩であることに気が付きます。あるものは不釣り合いなほど大きな突起を持っていたり、隆線*と沈線**を一分の隙もなく組み合わせた



図1 青森県立郷土館蔵 風韻堂コレク ション、田中義道撮影(青鹿長根遺跡) 図2 八戸市博物館蔵(田面木平遺跡) 図3 渋川市教委蔵(道訓前遺跡)

*隆線 ひも状の粘土を貼るなどして付けた、盛り上がった線

**沈線 棒などの先端を押し当てて引いた、窪んだ線

非常に複雑な紋様を持つものもあります。

縄紋土器の紋様はほとんどの場合、何を描いたか分からない抽象的な紋様で、人面・人体や蛇・サンショウウオなどの動物を表現したと思われる紋様は、長野・山梨を中心とする中期中頃に限定され、他の時期・地域では散発的で稀にしか見られません。

したがって、縄紋土器を観賞するということは、抽象画の鑑賞と共通すると言えます。私は美術鑑賞には全くの素人ですが、抽象画の鑑賞は何も考えずに見る、感性で見ると言われます。どう感じたか(すごい、きれい、おもしろい)、まずは自由に鑑賞して、次にすごいと思ったのはどこなのか、おもしろいと思ったのはどこなのかを言葉にしてみる。そして、友人と互いに感想を述べあってみる。そうすると、自分がどういう感性を持っているのか分かるといいます。

何かしらの感じた部分はほぼ間違いなく解説文が触れています。それを読めば一層自分の感性に対する理解が深まるでしょう。

ただ、個別の解説以前に縄紋土器には全般にわたる特徴がいくつかあります。

- ①部位ごとに区画され、その中をさらに分割して紋様が展開することが多い
- ②分割単位ごとの紋様が異なることがある。その結果、土器に正面と裏面ができる場合がある
- ③出来のよいものと、不出来なものがある。不出来なものは全体ないしは単位の一部に省略や手抜きがある

これらを踏まえて鑑賞すると、解説を読む以前の基礎的な理解が可能になると思います。

2 縄紋中期中頃の優品

いままでに私が最も衝撃を受けた土器が、図3の群馬県渋川市道訓前遺跡JP216号土坑から出土した焼町土器と呼ばれる土器です。国の重要文化財に指定されています。高さ62cmを測る大型の土器で、上記①～③の特徴から見ると次の点が指摘できます。

- ①中段の無紋帯を境として紋様が上下2段に分けられる
- ②正面・裏面ではなく、口縁の突起4個を軸として、4面で構成される
- ③隆線と沈線による紋様が隙間無く、緻密に施されている

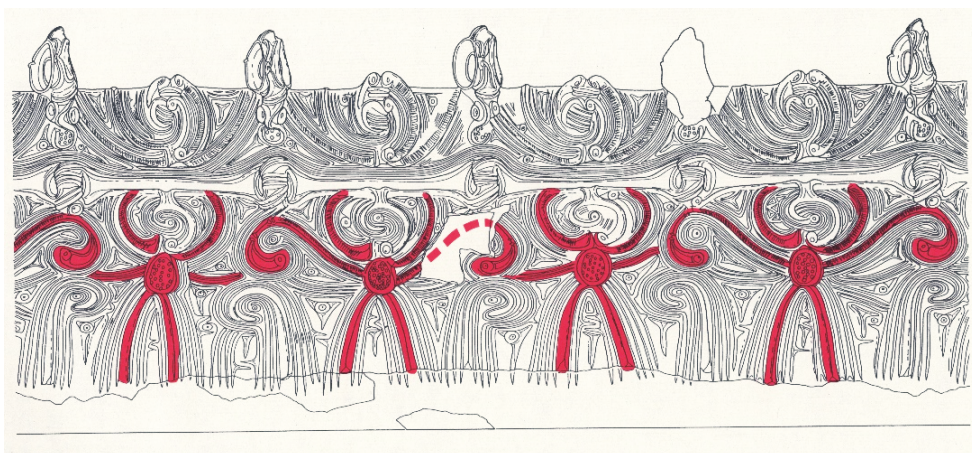


図4 図3の紋様展開図(北橋村教委2001道訓前報告書より転載)

図4で、上下2段の紋様をもう少し詳しく見ると、上段は弧線を中心とした紋様Aが、下段は人体風の2種類の単位紋様A・Bが交互に繰り返されて、上段の紋様に対応しています。なお、この下段紋様は男女2組が手をつないで踊る祭の様子を描いたと見る説もあります。土器の大きさから来る迫力といい、大胆かつ精緻な紋様といい、まさに太古の芸術作品と言えるでしょう。

2番目に感動したのが今回展示している大松遺跡SK096から出土した土器です。高さは道訓前と同じ62cmで、重くて一人で持てない重量があります。上記、縄紋土器の三つの特徴で見ると、

- ①口縁部、体部の2帯に分かれ、最下段にも狭い区画帯がある
- ②見る位置でまったく紋様が異なる二面性を持つ。一面は多数の渦巻紋様が目立つ(13～15個)が、その裏面は三角形を基調とした区画紋様が際立つ。
- ③個々の紋様、三角形区画は勝坂式の特徴だが、口縁部・体部とも紋様区画は不統一で、そうした構成を持つ勝坂式は西関東にはない。だが、見ていて違和感はない。

②のとおり、この土器は異なった角度から見るとまったく別の土器に見えるのです。しかし、ぐらりと回りながら見ると、渦巻が基調となる紋様から三角基調へと次第に移り変わっていることが理解できます。いわば、一つの土器で二度楽しめ、かつ二つの世界を回り灯籠のように見ることができると言えるでしょう。また、③の特徴によりこの土器を制作したのは大松遺跡の縄紋人と考えられます。袋状土坑内に完形品として立った状態で埋納されていたので、当時の縄紋人もこの土器を特別なものと見ていたに違いありません。

もう一つの逸品は、図6のやはり大松遺跡のSK226から出土した土器です。上記、縄紋土器の三つの特徴をあげると、以下の点が指摘されます。



図5 大松遺跡SK096出土土器 左側渦巻紋様主体 右側三角形区画基調



図6 大松遺跡SK226出土土器



図7 同紋様展開写真

- ①紋様は口縁部と体部の2帯となる。口縁突起がカタツムリ状の特異な形をしている。
- ②口縁部は主紋様として斜行するヘアピン状の隆線紋様がおそらく6単位で繰り返される。体部は道訓前遺跡のような4単位の人体紋がある
- ③隆線と沈線による紋様が隙間無く施されている

①のカタツムリ状の突起は同じ時期の新潟県の在り土器に付く特徴的な突起で、関東地方では他に1例があるだけです。また、口縁部の主紋様である斜行するヘアピン状の隆線紋様は富山県や石川県の中期中葉に特徴的な独特の紋様で、他地域にはこうした斜行紋様はほとんどありません。さらに、器肌の色は黄色味を帯びていてこの地方の土器とよく似ています。しかし、隆線は細くて北陸の豪快な斜行隆線とは違って、小さな円環が多数付くのは道訓前の土器と共通した特徴です。また、体部の人体紋は道訓前と同じ2種類が認められよく似ていますが、腕の表現が不完全です。このように、大松遺跡SK096の土器は千葉県では類を見ない異色の土器ですが、異なった地域の紋様が混合してどこで制作されたのか理解に苦しみます。ただ、この土器の制作者は複数の地域の紋様をほぼ正確に理解して、器肌の色までも再現しており、それらの土器を実際に見ていたのではないのでしょうか。

先にあげた縄紋土器の3つの特徴のうち、②と③の好例を見てみましょう。図8は②の正面を持つ土器です。幅の広い上段には小型の渦巻を伴う波形にうねった紋様が展開し、図の中央に1つだけ大型の渦巻紋様を配しています。また、図9は展示されていませんが、③のうち勝坂式を真似た紋様が見られるものの、メリハリがなくだらしない紋様で、不出来な土器との評価をまぬがれません。

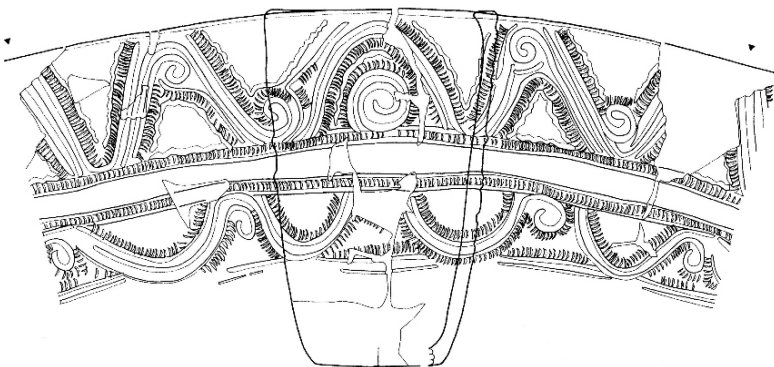


図8 小山台遺跡(43)SK029出土土器

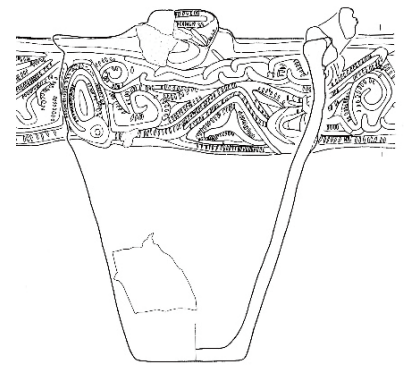


図9 大松遺跡SK198出土土器

3 斬新な土器

これまで紹介してきた土器と同時代であるにもかかわらず、まったく違った斬新な紋様を持つ土器をご紹介します。

図10は口縁に大きな隆線による横S字紋様が9個並び、体上部には2本単位の隆線で渦巻状の紋様が展開しています。この土器は体部下半が長く間延びしているものの、当時福島県で制作されていた土器とほとんど変わりません。また、図11は口縁の上にアンバランスなまでに高く盛り上がった大型の突起が2個乗っています。突起には3個の穴があき、裏側を見ると図10と同じ横S字紋が表現されています。丸みの強い口縁部も特徴です。これらの特徴からやはり福島県方面を起源とする土器であることが分かりますが、これほどデフォルメされた突起は福島には見当たりません。同様の突起を持つ例は関東に3例ほどあることから、デフォルメは関東で起こったと考えられます。

図12の口縁部にも横S字紋が乗っています。前の2点より1時期古いものですが、福島で見られる最も典型的な横S字紋です。一方、体部にはフリルのような飾りを伴う三角形の区画紋様が施されています。この三角形区画は図8の波形紋様に通じ、フリル状の装飾は蓮華紋と呼ばれていて、西関東の勝坂式の大きな特徴とされています。しかし、この蓮華紋はよく見ると勝坂式の蓮華紋とはやや違っていています。図13に模式図を示しましたが、勝坂式の蓮華紋は②や③ですが、図12の土器の蓮華紋は④で、正確な蓮華紋ではないのです。したがって、この土器は口縁の突起は東北、体部の紋様は西関東を真似たものであり、両方の特徴をミックスさせて東関東で制作された土器であることが分かります。

なお、余談ですがこの蓮華紋は北陸に起源をもつもので、長野・山梨を経て東関東で最終的に図12となったのです。



図10 小山台遺跡(55B)SK252出土土器

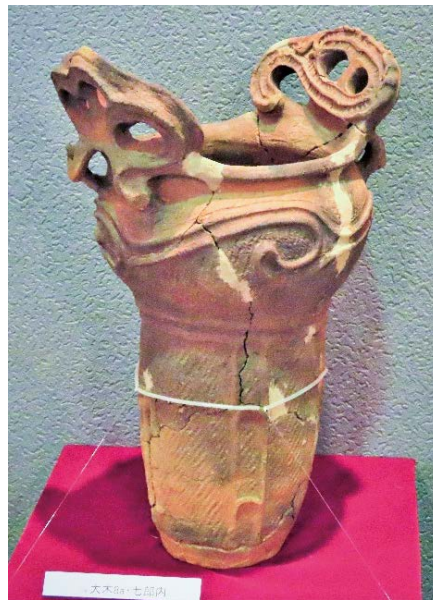


図11 小山台遺跡(17)SK072B出土土器

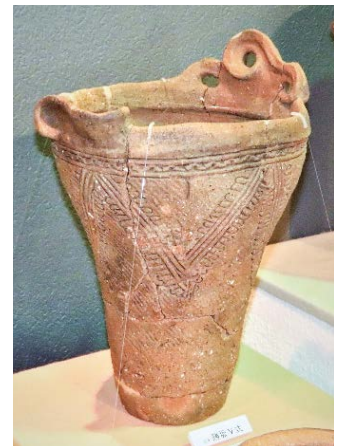


図12 大松遺跡SI097出土土器



図13 蓮華紋の変遷 ①北陸 ②・③中部・西関東 ④千葉(大松遺跡)

4 縄紋人が大好きな渦巻紋様

縄紋土器にはさまざまな地域や時代に渦巻紋様が現れます。図8は沈線で描かれた最も単純な渦巻紋です。また、図14は隆線による渦巻が中心部で折り返されていて変則的な渦巻に見えますが、沈線の渦巻として見ると中心部で2本の線が噛み合った渦巻紋であることが分かります。したがって、この折り返し隆線渦巻は、2本沈線による巴状渦巻から派生したものと見る事ができます。図5の大松遺跡の大型土器には単純な隆線・沈線の渦巻、折り返しの隆線渦巻、噛み合った巴状の隆線渦巻の3種が認められます。

図15には渦巻を伴う3重のS字沈線紋様が3単位で描かれています。図16に沈線の1本ごとに色分けしてみました。実際にこの紋様を書いてみると意外に難しいことが分かります。しかし、何度か試してみると書き順や3単位の紋様がどこから始まったのか、推測することができます。ヒントは緑の線が最初に引かれたこと、①の青の線に止めがあること、③の赤の線に逃げと途切れがあることです。このような謎解きも縄紋土器の楽しみ方の一つでしょう。



図14 大松遺跡SK077出土土器

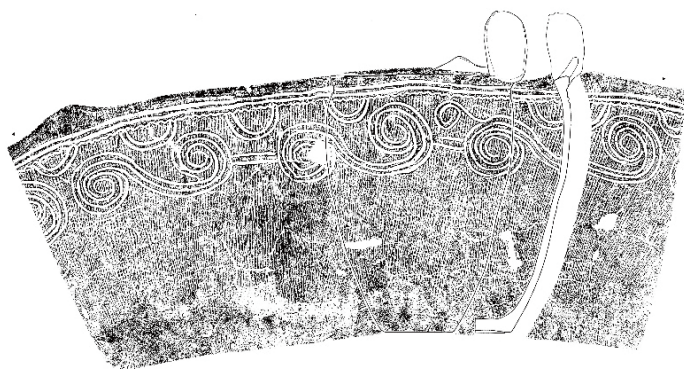


図15 小山台遺跡(55B) SK070出土土器

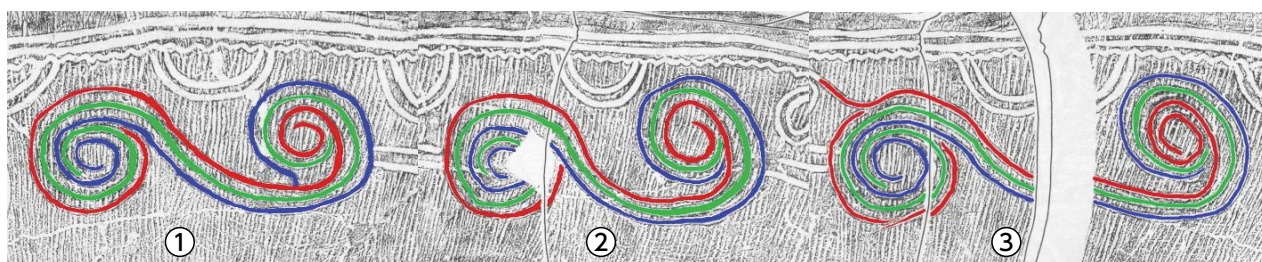


図16 図15土器の3重線によるS字渦巻紋様

5 結び

今回は柏市の2遺跡から出土した中期中頃の土器を例に、鑑賞の仕方や楽しみ方を紹介してみました。皆さんの地元にも必ずすぐれた縄紋土器があるはずで、地域の博物館や資料館(最近ではデジタルミュージアムも開設されています)で、そうした中からぜひお気に入りのマイ土器を発掘してみてください。

参考文献

土肥 孝2007「縄文土器 中期」『日本の美術』第497号 至文堂
飯塚真人2021「『新崎式土器』の再検討－遺構・層位的事例に着目して」『溯航』第39号 早稲田大学大学院文学研究科
考古談話会

貝塚のあるムラ・ないムラ

—海鮮食材利用からみえる縄文社会—

西野雅人

はじめに

国内外で高く評価され、ユネスコの無形文化遺産に登録されてから間もなく10年を迎える「和食」。鮮度のよい海産物へのこだわりは、その大きな特徴といえます。全国各地で数多の食材を探索し、獲得・加工・調理の技術を研ぎ、新鮮な食材を活かした多様な食文化が花開いた縄文時代。その食事の主役であった「縄文鍋」は和食のルーツとってよさそうです。

「東京湾東岸の大型貝塚群」は、千葉の食材を活かして定住生活を実現したムラの集まりであり、縄文文化の繁栄を象徴する存在として知られています。いっぽうで、今回巡回展の舞台となった柏北部東地区の発掘調査では、それに勝るとも劣らない規模のムラの集まりが発見されていましたが、貝はまったく持ち込まれなかったようです。「貝塚のあるムラ・ないムラ」という海鮮食材をめぐるまったく異なる二つのありかたから縄文社会をみていきたいと思います。

1 大型貝塚以前

(1) 肉食動物から雑食動物へ

肉食と遊動 ホモ・サピエンスは約20万年前にアフリカで誕生、約10万年前に世界各地へと旅立ち、3万5千年前ころ千葉に上陸。以来2万5千年もの長い間、野生動物の狩りが生活の中心でした。類人猿のなかで唯一、ヒトは肉食を特徴とする動物だったのです。縄文土器の誕生は16,000年前に遡りますが、土器の利用は一般化せず遊動と肉食の時代が続きました。

雑食化 約1万年前、東京湾や現在の利根川・鬼怒川などの深い谷川に沿って内海が形成され、貝塚が現れます(神崎町西の城貝塚・船橋市取掛西貝塚)。貝塚の形成を定住の証拠に挙げる研究者もいますが、この時期の貝塚はごく少なく、遺跡の分布は旧石器時代と変わらず、海から一番遠い分水嶺付近に集中しています。魚貝類の利用は限定的で雑食化の画期はさらに後の時期といえます。

遺跡が広域に広がり、魚貝類や堅果類などの利用が広がり始めたのは約7,000年前です。このころから、日本各地で食材の探索と、獲得や調理の技術開発が盛んになります。環境の変化と土鍋の利用によって、私たちの祖先は究極の雑食動物として力強く歩みはじめたのです。

(2) 縄文早・前期の貝塚

海産資源利用の開始 縄文早期後葉から前期前葉は海域がもっとも拡大し、河口の干潟でハイガイやマガキなどによる小さな貝塚がたくさんできました。東京湾の漁業の歴史はここから始まったといえます。住居跡は少なく、多くの遺跡では屋外の炊事施設(炉穴)だけが見つかります。炉穴は広い範囲に分散するのが普通であり、遊動生活をものがたっています。ただし、著しく重なりながら大規模に展開する例が現れます。船橋市飛ノ台貝塚、千葉市鳥喰遺跡群、市原市天神台遺跡、袖ヶ浦市中六遺跡です。遊動をつづけながらも、繰り返し利用する拠点的な場所が現れたのです。広域を移動するのではなく、各地域にある食材を探索し、利用の知恵を磨くことによって、魚貝類や植物質食材の利用が広がって

きました。これが「雑食化」への大きな画期になったと考えることができます。

前期の貝塚「奥東京湾」^{おくとうきやうわん}を囲むように沿岸地域に貝塚・集落が集中。県内では東葛地区にムラが集中しました。「古鬼怒湾」^{こきぬわん}の最奥部も柏市付近まで入り込んで、二つの海があったのです。使わなくなった住居跡の床面にこんもりと盛り上がる小規模な貝層が多く、比較的活発に貝類を利用していますが、中期以降の大型貝塚のような大規模な貝層はごくわずかな例外を除いて見られません。海に出ても魚は採っていなかったようで、貝層のなかには貝と土器のみというのがほとんどです。

イルカやマグロ・カツオ、貝類など、知識と技術があれば一度に大量に得られる食材の活発な利用は前期の特徴です。以下は代表例です。

波怒棄館遺跡(三陸・気仙沼市)^{はぬきだて} : マグロの椎骨140kg

真脇遺跡(能登半島・能登町)^{まこわき} : イルカ286頭分

宝導寺台貝塚(東京湾・千葉市)^{ほうどうじだい} : 大量の大きなハマグリとマガキ、厚さ2mの貝層

宝導寺台貝塚は数少ない大規模な貝層の事例で、当時の海岸線にハマグリやマガキの大きなものを大量に廃棄しています。春を中心に貝の生干しづくりが行われた場所です。

(3) 謎の地下迷宮遺構

奇妙なトンネル 写真1は、今回の展示でも取り上げている小山台遺跡から見つかった縄文前期後葉の貝層断面です。ハマグリ主体の貝層は大量の灰に覆われており、灰をぬぐうと、貝殻は6,000年も前とは思えないような色艶を残していました。古鬼怒湾最奥部でこの時期に海水産貝類が生き残っていた証拠として、とても貴重です。ところが、このあと想像もできない驚きの結果がまっていました。

貝層は径1m、深さ1.6mほどの深い竪坑の上部に入っていました。底の方で掘っている人が「壁が出ませーん」というのです。代わって掘ってみると、横にどこまでも掘れてしまいます。同じような竪坑は最終的に16個見つかったのですが、

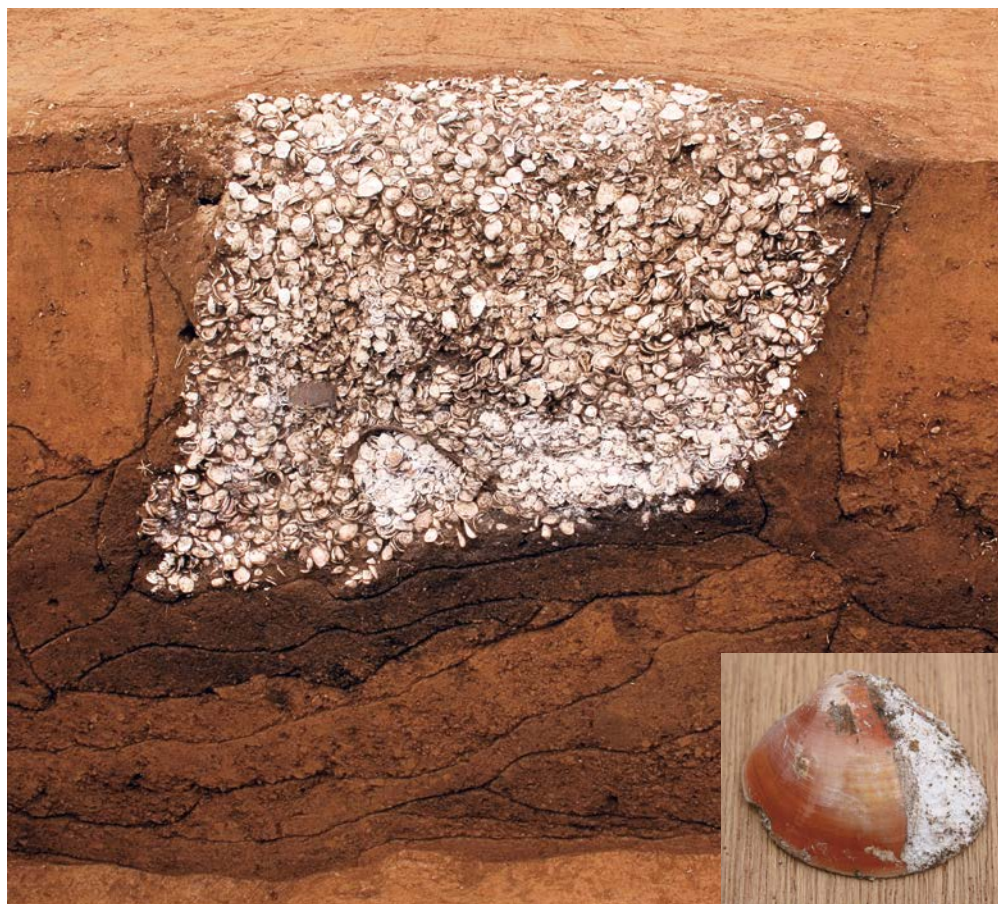


写真1 SK001貝層断面ときれいなハマグリ

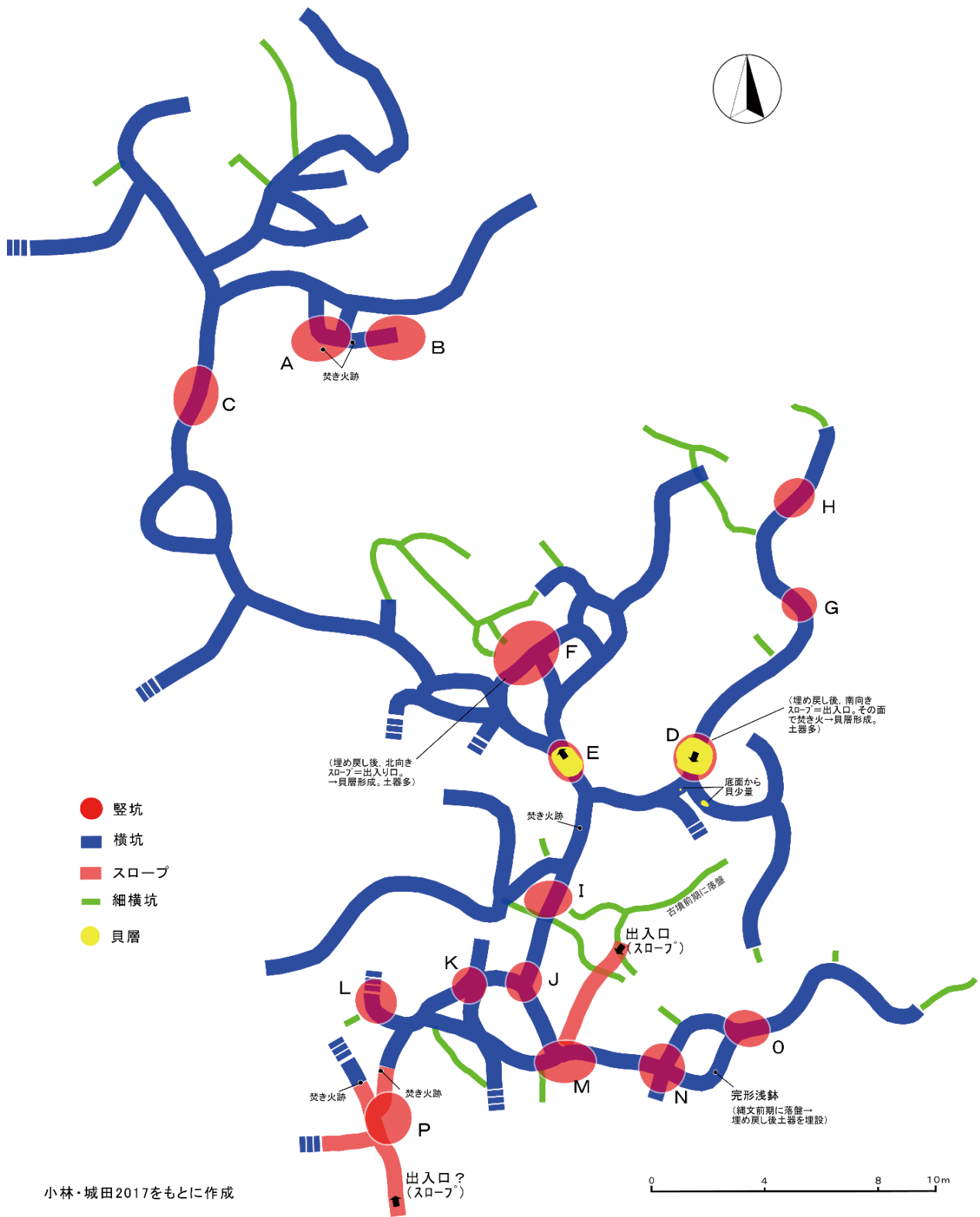


図1 小山台遺跡のトンネル状遺構模式図

なんと全部の竪穴が高さ70～90cmのヒトがしゃがんで通れるくらいの横坑で繋がっていたのです(図1)。横坑はくねくねと曲がって複雑に交錯しており、総延長は310mにもなりました。このような地下迷宮は、人が掘ったものとしてはあまりにも不思議です。2か所の貝層の堆積、横穴の底の焚火、出入

口とみられるスロープが見つかりました。貝層や焚火など、人が関わった明確な証拠が見つかっていなければ、調査を途中でやめていたと思います。

こんな奇妙なものを遺構だと報告しても、だれも信じてくれそうもありません。そこで、たくさんの関係者に声をかけて現地を見てもらいました。そのなかに「わたしも同じものを掘りました」という人が二人いました。その後、同様の例は増えていき、現在20例ほどになっています。数多ある原始・古代の遺構のなかでも、これほど謎に満ちたものは他にないと思います。

遺構の正体 図1にみえる「細横坑」は径30cmくらいの横穴で、アナグマが掘った巣孔自体のようです。道具を駆使しても人が掘るのは不可能であり、このような大きさの穴を掘る動物はアナグマ以外に見当たらないからです。巣穴は何世代にも引き継がれ複雑なトンネルを形成していきます。

トンネル状遺構はアナグマ猟が行われた場所の可能性が高いです。「横坑」は人が通れる大きさに穴を広げたもの、スロープは掘り始めた場所であり、人の出入口とみられます。「竪坑」は土の排出口であり、明かりとりでもあったとみられます。焚火による燻りだしや、松明をもって移動した形跡も認められます。深い巣穴に棲むアナグマに特化した猟が行われた場所だったのです。

アナグマは本州から九州の多くの貝塚から出土しており、古代からとくに美味しいものとされてきました。たとえば、平安時代の歌人として著名な藤原定家は『明月記』に「殿上人が良き肴とした」としていますし、中国・明代の『本草綱目』には「肉は野獣の中でも最も甘美」「人が食べると死に瀕した状態から治る」と書かれています。この遺構も、特定の食材の獲得法が発達する前期の特徴に合致するものだったのです。

2 中期の大型貝塚－定住型のムラ－

(1) 大型貝塚と定住化

今から約5,000年前、縄文中期の中頃に東京湾東岸にたくさんの貝層をもつ大きなムラ(図3の▲)がたくさんできます。この地域に、採集狩猟民としてはきわめて多くの人口が集中していたことは疑いのないところです。大型貝塚の集中は現在の流山から船橋にかけてと、千葉市・市原市の二か所に別れています。二つの地域は、東京湾の最奥部に広い河口干潟ができたところです。人口の自然増では説明が付かないので、他の場所から移り住んだ集団が、新しい地域社会をつくったといえます。河口に形成された干潟の豊富な海産資源は、計画的な資源利用にとって、とても魅力的なものでした。これに目を向けた関東各地の集団が移り住んだのが東京湾東岸の中期大型貝塚群であると考えられます。図2のように竪穴住居のかたちやヤマイモ等の利用は西関東、ドングリの穴貯蔵は北関東、ハマグリと小魚漁は東関東で、中期前葉に発達していました。これらを組み合わせて、さらにイボキサゴ漁を加えるなど、多くの文化を統合しています。

中期大型貝塚はドーナツ状の遺構分布をもつムラです。中央の「広場」を囲んで貯蔵穴が掘られ、住居はその外側に建てられ、大量の貝殻は斜面と外縁部に近い住居や貯蔵穴に廃棄しました。大きな特徴は、施設の種類や数・配置、



図2 広域の文化を統合模式図



図3 貝層のあるムラとないムラ
(千葉県地形と縄文時代中期中葉=中期大型貝塚形成期のムラの分布)

出土する遺物の種類・数などが、どのムラもよく似ていて終始一貫していることです。地域社会全体で共通した明確な方針と高い計画性を共有し、強い絆があったのでしょう。そのいっぽうで、大型貝塚群のごく近くには、貝殻を持ち込まないムラのまとまりがありました。生産と居住様式の異なるグループが存在を認め合い連携していたと考えられます。

(2) ムラと海

大型貝塚の多くは水系の奥部にあります。丸木舟まるきぶねを使って、日常的に河口干潟に漁に出ていたようです。エンジンのない舟を使って漁場に行き来するためには、引き潮を利用して漁場に行き、満ち潮を利用して集落へ帰っていたはずで、図4は、加曾利貝塚がある都川河口の例です。干潟で多くのムラの人々が出会っていたことでしょう。



図4 都川水系の貝塚ムラと海岸線

(3) 定住を支えた食

「雑食化」によって、食材探索の幅は全国各地の海・山に広がり、そのなかから毎年入手できる食材を組み合わせ、貯蔵技術を導入することによって、一年を通じた安定した食事を実現しました。定住生活と多くの人口を保つことができたのは、東京湾の海産資源の通年的な安定利用と、それによって食べやすく調理されたデンプン質食材の利用の拡大にあったと考えます。当時の食事は鍋料理が中心であり、うま味や塩分の効いた鍋がいつも食べられることが、人口と定住を支えたという見立てです。出土人骨に残るコラーゲン分析は、全国の縄文人が実に多様な食事をしていたことを明らかにしました。動物食から植物食まで、地域差がきわめて大きいのです。東京湾東岸の縄文人は、堅果類や根茎類けんかるい こんけいるい、イノシシ・シカ・タヌキ・ノウサギを中心とした森林資源、小魚・イボキサゴ・ハマグリを中心とした海産資源など、あらゆる食材をバランスよく活かしていました。そのうち、イボキサゴとハマグリ、ドングリやクリ・マメ類、イモ類など、計画的に安定して利用できる食材につよく依存していたようです。決して魚貝類に偏ってはおらず、大型貝塚を作った人たちは漁撈民ではなかったのです。

大きな貝塚をつくった小さな貝 写真2は千葉市ありよした有吉北貝塚の平均的な貝の割合を示したものです。このように中期大型貝塚の貝はイボキサゴと小形ハマグリが圧倒的に多く、この2種を目的とした貝の漁が行われたといえ、一年中採取されています。大きな貝塚は、舟をつかって日常的に海に行き、たくさんの貝を採取してくるによってできたものです。

なぜ、これほどたくさんの巨大な貝塚ができたのか？これは、縄文文化全体のなかでも大きな謎といえます。その答えとして、後藤和民氏かずひと ほしかいの「干貝加工場説」があります(後藤1973など)。干し貝生産により実現した「計画的・恒常的に利用できる食料の確保と貯蔵法の発達」が、この時期のムラの定着・集中・

大型化をもたらし」、大型貝塚を形成したというのが中心的な論点です。縄文人がどのように定住生活を実現し、安定した社会をつくったのかを中心に、当地域の縄文文化・社会の発展を総合的に考察した壮大な学説であり、研究だけでなく、貝塚あるいは縄文時代のイメージ形成に大きな影響を与えました。わたしは後藤説に憧れてこの道に入りましたが、分析を進めて行くうちに、大型貝塚の貝類は干し貝としてよりも、生の貝が日常的に入手できたことに価値があったと考えようになりました。考えの根拠をいくつか挙げます。



写真2 平均的な貝類構成の例(千葉市有吉北貝塚)

- ① 東京湾東岸の大型貝塚はみな通年定住型のムラであり、生業は貝漁に偏らず、あらゆる食材が持ち込まれている。生活の拠点であって“漁村”や“加工場”といった要素はきわめて薄い。
- ② 殻付きの貝を海から遠く離れたムラまで頻繁に運び込んでいるのは、保存食としてより、生の貝が安定して利用できる点にメリットがあったからだと考えべき。
- ③ 大型貝塚の貝の9割近くを占めるイボキサゴは、きわめて小さく身を取り出して干し貝を作るのは効率が悪すぎる。
- ④ 干貝加工場とすべき貝塚は、当時の海岸線付近で発見されており、大きな貝を選んでいる。

調味食材説・相互補完説 「干貝加工場説」への対案です。通年定住を支えたドングリやイモ類などの植物質食材と、イボキサゴ・ハマグリ・小魚などの魚貝類は、食材として対称的な特徴を持っています。ドングリやイモ類は、栄養価は高いのですが、もともとヒトにとって食べにくいという特徴があります。あく抜き等の下処理や粉食加工の技術が発達したことによって重要な食材となっていきましたが、塩分を含んでいないため単独では食べにくいのです。いっぽう、イボキサゴやハマグリは、栄養価は高くありませんが、塩味やうま味を持っています。土器を使った鍋料理は、年間を通じて利用が可能な二種類の食材の利点・欠点を補うものだったのです。

つまり、大型貝塚の貝は、鍋料理に塩分とうま味を与える「だし」のようなものとしての魅力が大きかったのではないかという考えです。ただ、「だし」という言葉はぴったりではない感じがします。シジミ汁に例えると、「だし」というべきものはシジミのエキス成分であってシジミ自体ではありません。シジミの身を食べるかどうかは好みが分かれますが、身は食べるが汁は飲まないという人はあまりいないと思います。大型貝塚の小さなイボキサゴやハマグリも、土器で煮た場合には現在のシジミと同様に身の価値は相対的に低く、どちらかといえばエキス成分のほうが重要であったのではないかという見立てです。このような食材を指す言葉は存在しないようだったので「調味食材」と呼ぶことを提案しました。

海鮮食材のうま味とデンプン質食材を活かした鍋料理が定住を支えたのです。

盤洲干潟のイボキサゴ こうした考えを深めたのは大型貝塚の二大構成種のうち、個体数で9割を占

めるイボキサゴについて、詳しく調べてはじめ、盤洲干潟^{ばんず ひがた}で実際にイボキサゴを採取する体験を行えるようになってからでした。東京湾のイボキサゴは、埋め立てなどによってほぼ絶滅したとされていましたが、1995年ころに復活し、木更津市の「盤洲干潟」^{ばんず}に大蕃殖しています。ほかでもない、東京湾のイボキサゴを観察し、採取して食べることができるようになったことは、何よりうれしいできごとでした。

実際に採集してみると、他の食材にはない独自の特征があることがわかりました。好条件で道具をうまく使うと、短時間で大量に採取できることです。海水を被った場所で底の表面をさらい、ざくざくと砂を洗い流すと一人で食べる分くらいは採れてしまいます。条件のよい場所では、他の貝やイボキサゴの死殻はほとんど混じりません。砂に潜っていないので、かごに柄をつければ、舟上から採取できたはずで、ムラに帰ったらあとは鍋に入れるだけです。これほど効率よく安定的に入手できて手間のかからない食材はほかにないと思います。しかも、とても美味しいのです。日常的に安定して短時間で入手できることが大きなメリットなので、干し貝に加工するといった身を取り出す手間をかけたとは考えにくいところです。

類例のないほどの貝類の活発な利用の理由は、鮮度の良い貝を日常的に利用できることにあった、ということ間違いなくと思います。

3 貝層のあるムラ・ないムラ

(1) 自家消費か否か

東京湾東岸の大型貝塚は「干し貝加工場」ではないとすると、多量に持ち込まれた貝はそのムラの人たちだけが消費していたのでしょうか？ 図5のムラの分布を見ると、それでは説明できないことは明らかです。生の貝＝鮮魚でないものが内陸のムラにも運ばれていたことを想定できそうです。

東京湾東岸に大型貝塚群ができたころ、下総台地の広域に貝層を形成しないムラが多数まとまりをもって分布しており、大型貝塚群と接するところまで伸びています。いくつか具体的に見ていきましょう。

(2) 大型貝塚と手賀沼周辺のムラ

図5にみえる手賀沼の水系に分布する二つのムラの集まり(三ヶ尾低地-柏・我孫子低地集落群^{さんがお}と矢切低地-手賀沼低地集落群^{ぎり})は、大型貝塚が点在する今上低地貝塚群^{いまがみ}にごく近接しているにも関わらず、貝層を形成していません。貝殻付きの貝は、茶色の点線で示した分水嶺を超えていないのです。



図5 千葉北西部のムラの分布

手賀沼の北側 野田市の山崎貝塚^{やまざき}と東亀山遺跡は、二つの水系のもっとも近接したところにあり、台地上をほぼ直線的に歩くことが可能です。距離はわずか1.6kmです(図16)。隣のムラ同士で、いっぽうは活発に貝を利用し、いっぽうは全く利用しないということは、考えにくいところです。東亀山遺跡の人たちも貝類をなんらかの形で利用していたとみるべきでしょう。スープなのか、干し貝なのか、そのあたりはこれからの課題です。



図6 山崎貝塚と東亀山遺跡

内陸側のムラの分布は東亀山遺跡から長く東側に伸びて我孫子市並塚東遺跡^{なみづかひがし}に至ります。その間には、今回の展示で取り上げられている小山台遺跡^{こやまだい}・大松遺跡^{おおまつ}と、出山遺跡^{でやま}・中山新田遺跡^{なかやましんでん}・水砂遺跡^{みずすな}という大規模な非貝塚集落群があります。ムラの規模は東京湾側の大型貝塚に引けをとりません。出山遺跡は流山市中野久木谷頭遺跡^{なかのくきたにがしら}・小谷遺跡^{こやつ}などの貝塚群と近接しており、出山遺跡と中野久木谷頭遺跡の距離は2.7kmです。

手賀沼の南側 やはり同様のムラのまとまりがあって、松戸市東平賀貝塚^{ひがしひらが}と根木内遺跡^{ねぎうち}という大型貝塚から東に向かって、貝層をもたないムラの分布が伸びて柏市榎方遺跡^{ますかた}に至ります。刈込台^{かりこみだい}・追花^{おっけ}・榎方の3遺跡は大規模なムラですが貝殻は出ていません。手賀沼の北側と少し事情が異なるのは、元木戸遺跡^{もとぎど}・笹原遺跡^{ささはら}・宮ノ脇遺跡^{みやのわき}という分水嶺の西側、すなわち東京湾側の水系に立地するのに貝層が発達しないムラの存在です。近年柏市笹原遺跡で発掘が行われて貝類の利用の実態が見えてきました。もっとも多いのがハマグリであり、砂泥底の干潟と谷奥の泥干潟で雑多な貝種を大きさにこだわらずに採取しています。計画的に採取するのではなく、時折、自分たちで干潟に出て入手していた様子が伺えます。大型貝塚と内陸の貝層をもたないムラの間接的なあり方といえます。

手賀沼を渡った場所 手賀沼の北側と南側のムラの分布の広がりを見ると(図5)、東端のムラの位置がほぼ同じです(並塚東遺跡と榎方遺跡)。この部分は手賀沼がもっとも狭まり、浅くなった部分で、現在も手賀沼大橋が懸けられています。「生の貝でないもの」は、ここまで運ばれていたと考えられます。

(3) 高根木戸と海老ヶ作

奥東京湾貝塚群の南端部にも大型貝塚に接する貝層をもたないムラの分布がみられます(図3)。船橋市高根木戸遺跡は貝塚群南端部の大型貝塚です。海老ヶ作遺跡は古鬼怒湾側の水系に立地していますが、かなりの規模の貝層を形成しています。中期では、分水嶺を超えて多量の貝類が運ばれた唯一のムラです。周囲には貝層を持たない、またはごく小規模な上ホシ^{かみ}、薬園台^{やくえんだい}、源七山^{げんしちやま}、八王子台^{はちおうじだい}・西芝山南^{にししばやまなみ}の各遺跡が点在しています。海老ヶ作遺跡は分水嶺を超えた位置にあるムラ、さらに神野貝塚^{かの}などの八千代市内のムラと貝類資源の利用等で連繫していた可能性があります。分水嶺を超えているといっても、高根木戸遺跡と海老ヶ作貝塚の距離はわずか1.8kmしか離れていません(図7)。

(4)大型貝塚と九十九里側の狩猟拠点

定住ムラの狩り 中期大型貝塚を発掘すると、どのムラのどの貝層を掘ってもある程度骨が入っています。人口が多い地域で、陸獣を安定して入手できたのは、内陸の狩猟好適地で複数のムラが参加した狩りが行われたからと考えられます。狩りの場の候補である内陸部には貝層がないので骨は残っておらず、決め手がない状況でした。近年待望の遺跡が見つかりました。東金市と大網白里市にまたがる養安寺遺跡です。丘陵部の斜面貝層から大量のイノシシとシカの骨が出土したのです。

養安寺遺跡と周辺のムラ 標高70m以上の台地/丘陵上に立地しています。二つの回廊(茶色の点線)が交わる場所に近く、東京湾沿岸の大型貝塚群からは平らな道を12～15km、日帰りも可能な距離です(図8の赤い点線)。

養安寺遺跡では多量の骨を含む貝層が見つかりましたが、同じ時期の住居跡は少なく通常のムラとは異なっています。東京湾沿岸の貝塚では少ないシカの頭部がここでは多く、シカの顎の骨を使った道具が目立つなど狩猟拠点の可能性が高いと考えています。内陸のムラは、印旛沼低地南部集落群を通じて、房総の三大水系(東京湾・古鬼怒湾・九十九里)の間をつなぐように分布しています。東京湾沿岸の大型貝塚群の人々はこうしたムラとの関係のなかで、多様な資源を入手していたでしょう。

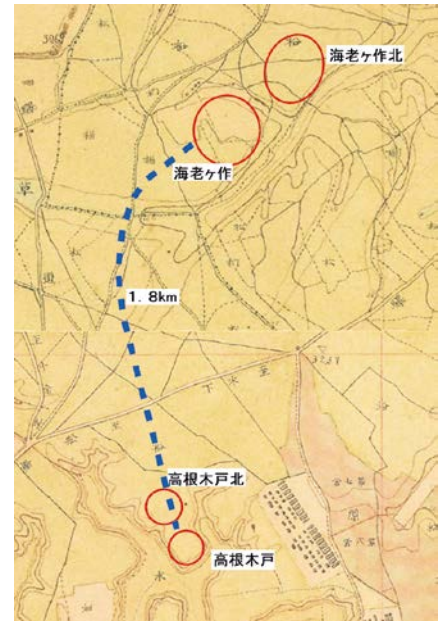


図7 高根木戸と海老ヶ作



図8 東京湾と九十九里側のムラの分布

おもな参考文献

- 小川将之他2020『笹原遺跡(第19次)一宅地造成に伴う埋蔵文化財調査一』地域文化財研究所
- 上守秀明2022「貝塚のあるムラ・ないムラー東京湾と古鬼怒湾の縄文時代中期一」船橋市教育委員会『縄文大学』資料
- 後藤和民1973「縄文時代における東京湾沿岸の貝塚文化について」『房総地方史の研究』雄山閣出版
- 小林清隆他2017『柏市小山台遺跡A区 縄文時代以降編』千葉県教育振興財団
- 西野雅人2019「トンネル状遺構：大久保遺跡・大室小山台遺跡」『柏市史(原始古代中世 考古資料)』柏市教育委員会

令和4年度出土遺物公開事業
柏北部東地区の遺跡展―地中からの目覚め―
講演会講演要旨

発行日 令和5年2月19日
編集・発行 (公財)千葉県教育振興財団
〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2番
TEL. 043-422-8811(代)
印刷 株式会社エリート情報社[印刷出版局]



公益財団法人
千葉県教育振興財団